巻頭言

開かれた研究会活動のために

松　本　大　四†

重厚長大の時代が終り，世を挙げて軽薄短小がもてはやされている．エネルギ消費型は後退し，知識型，ソフトウェア型が替わって幅を利かせている．RAMが月に数千万個，パソコンが年に数百万台売れている．INSだ，ニューメディアだ，高度情報化だ，と次の山に夢を托す．まさに情報のゴールドラッシュである．

むんむんする熱気が充満しているようなこの頃ではあるが，その底に確実に動いている時代の流れがあるはずだ．情報処理学会も，表の波に竿をさしながらも，その底の流れをしっかりと見据えて，来るべき時代にまっしぐらに突き進むフロンティアたらねばならない．この時に当たって当学会の各研究会が活発に活動していることは，実に喜ばしいことであるが，その活動のより大きな拡がりと，レベルの向上に対する世間の期待もまた大である．

本誌8月号のこの欄で高村氏は「受け手の論理に立った通信」に就いて説かれ，昨年の8月号で高月氏は，「使い手の学会参加」を呼び掛けられた．受け手の論理に立った通信，使い手の論理に立った情報処理は，多数の方々がその重要性を指摘しておられるところである．小さな事例ではあるが，スプレッドシートやワープロ・ソフトによるパソコンの急速な普及などは，この流れに沿って成功した試みの一つであろう．データベース，データ通信，知識ベース，エキスパートシステム等々，幾多のアイディアが提案され研究されており，それ等を実現するためのツールとして，CADやソフトウェア技術等が研究されている．これ等もまた，それぞれの使い手の真の心を掴んだもののみが生き残り，次代を切り開いて行くであろう．

役に立ち，広く使われる技術を生み出すには，使い手や受け手の参加が是非必要である．研究会やシンポジウムの場に，その分野でよりレベルの高い使い手が容易に参加できる環境を作り出したいものである．使い手の参加を得て，そこで使い手の論理もとことん議論できるようにしたい．

一方，作り手や送り手の論理を使い手に知らせることも，使い手の論理を知ることと共に大切である．この点については，使い手の研究会参加の他に，研究会による各種出版活動，講習会やチュートリアルの開催等が考えられる．情報処理学会と友好関係を結んでいる，米国のACMの教育活動は活発である．我々の範たり得るものであろう．研究会活動の一環としてこの教育活動の活発化が期待されるところである．

ソフトウェアの後進性，オリジナリティの不足を心配する声がある．MVS，CP/M，UNIX，等普遍性の高いソフトウェア製品のほとんどが米国製であるという事実からいわれたことであろう．

これに対しては，独自性を尊重する日本のユーザマインド等のいいわけもあるが，指摘はやはり素直に聞いて，より一層の精進に努めるべきであろう．しかし，ソフトウェアとシステム構築との間に相関関係があるならば，TQCを始め世界に比類ないハードウェアの量産システムを生み出した実績から見て，ソフトウェア産業もまた我が国において，最も大きな可能性を持つ分野だと言えよう．研究会活動の場を通じて，学際的，業際的あるいは国際的な輪を拡げ，技術と研究の高度化を成し遂げて行かねばならない．

以上に述べたように，「使い手の研究会への参加」，「情報処理技術の普及，教育」，「研究の高度化」を通じて会員数を増やし，研究会活動の一層の活性化を図ることは，我々の願いである．そのための良い提案があれば，積極的に研究会に出していただきたい．そのために活きるかねと努力なら，惜しむべきではないであろう．

来年は当学会創立25周年目を迎える．この記念の年に各研究会が競って記念論文を選定することとなっている．情報処理技術の振興と普及のために奮ってこの企画に参加されるようお願いしたい．

(昭和59年10月27日)

† 本会常務理事　三菱電機(株)高度情報通信事業推進本部